生徒と地域に心を注ぐ

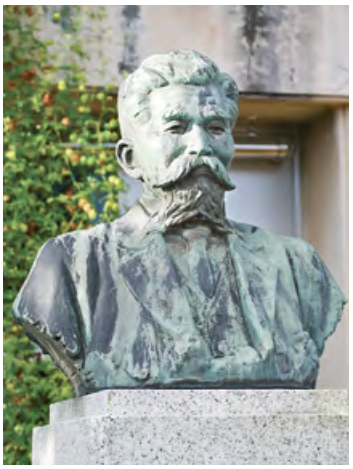
歌碑 荒木正恭 ―下之町―

壁崖に
呼びかけてゆく
九重の滝坂に見む
千草八千草

荒木正恭は1923（大正12）年から20年間、沼田小学校長として在職しました。約5千人の卒業生を出し、生徒や地域から愛され尊敬されていました。

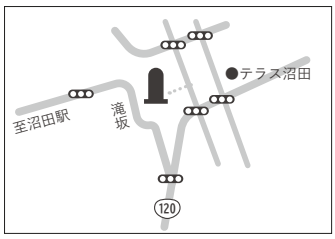
当時の沼田小は全校児童2800人余りの県下一のマンモス校。児童に話し掛ける大切な機会として、正恭は全校会礼に力を注ぎました。また、どんなに忙しい校務や出張のときでも、毎日校舎を一巡して児童や教師に声を掛けたり、学校の名前入りのちょうちんを持って町を巡視したりもしました。黒のフロックコートに白手袋、黒の山高帽を手にし、小柄で鼻下に八の字の立派なひげとあごひげを生やしていた特徴ある姿の正恭。町でもにこやかに朝夕のあいさつに努めていたことから、「優しい父親のように親しまれていた」と、多くの逸話が残されています。

碑は、卒業生の青年有志で組織した「友和会」が、正恭が住んでいた滝坂の階段を下りた沢の近くに建てました。「九重の滝」と変化のある美しい滝の周辺の景観は変わってしまいましたが、滝坂は今でも沼田小児童が通学路として利用し、朝夕、元気な笑い声が聞こえてきます。碑に刻まれた額には「総厚生」と掲げられ、「全てのことは、体力、健康を基本とし、豊かな暮らしができるように」という理念の下に活動していたといわれています。



正恭の退職後に結成された顕彰会は、1957（昭和32）年に沼田小校庭に胸像を建てた

歌に託す 未来を背負う 子らへ

いつの時代も、子どもは地域の宝であり希望です。人間性の豊かさや奉仕の精神を育む思いが込められた碑は、今も子どもたちを見守っています。

正恭は滝坂に位置した旅館に居住していたという。放課後、下町から通う沼田小児童が、楽しそうな表情を見せながら滝坂を通って下校する